

に迷惑がかかったり、その結果として、システム全体が崩壊したり、「ただであること」が終ったりする。ただのシステムが崩壊すること事態は必ずしも悪いこととは限らないのであるが、利用者がその意図に反してボランティア提供者に迷惑をかけるようなことにならないかどうかは常に気をつける必要がある。地球流体電脳倶楽部の資源についていえば基本的な前提は利用者がメーカーである、つまり利用したいので作る、と言う点である。

少なくとも次のことは肝に命じておかなければならない：

無保証、自分の環境の責任は自分でとる。自分のことは自分でやる。

このことはしかしながら通常は正に読みとって、自分の責任において何をやっても良い、いろいろな情報がフィードバックされることを生産者は期待する、あるいは、さらにもう一步進んで、また新たなものが生み出されることを期待している、と理解される。しかし、とりあえず末端利用者は、システムがダウンしてメールが届かなくなっても、「まあこういうこともあるんだな」と(たとえどんなに重要な仕事を抱えていても)リッチに構えていられればそれで良い。お急ぎの人は諸々のバックアップルート(電話やFAXや郵便、あるいは有償のInternetプロバイダ)を確保し、いざという時には退避しなければならない。

日本気象学会1995年秋季大会シンポジウムのお知らせ 「大気レーダーが開く新しい気象」

●日 時：1995年10月17日(火)(秋季大会第2日)
午後

●場 所：アウィーナ大阪4F 金剛の間
(秋季大会A会場)

●世話人：深尾昌一郎・山中大学
(京都大学超高層電波研究センター)

●趣 旨：

VHF/UHF帯電波を用いた晴天大気レーダー技術は、10年前に関西地区(滋賀県信楽町)に建設された京大MUレーダーに代表されるように、当初は中層大気波動など主として基礎研究に使用されていたが、近年は小型化した各種ウィンドプロファイラ、境界層レーダーなどとして市販され、従来のレーウィンゾンデ観測にない時間的高分解能、同時・同場所性、自動観測性などの特徴を生かして、対流圏気象学の研究にも大きな貢献をなしつつある。既に欧米の気象官署では本格的導入が開始されており、最近に至って日本の気象庁でもルーチンの利用に着手した。本シンポジウムでは、各種大気レーダーの現状を踏まえ、今後の気象学研究ならびに気象事業への利用について、広く展望することを目的とする。

●プログラム

1. VHF/UHF帯大気レーダーの現状と技術的展望
深尾昌一郎(京都大学超高層電波研究センター)

2. 気象観測における大気レーダーの位置づけ
中村 健治(名古屋大学大気水圏科学研究所)

3. 気象庁におけるウインドプロファイラデータの導入
八木 正允(気象庁観測部産業気象課)

4. 大気レーダーの数値予報への利用
岩崎 俊樹(気象庁予報部数値予報課)

5. 総合討論(コメンター数名を含む)

司会：山中 大学(京都大学超高層電波研究センター)

●問い合わせ先：

内容等に関する御質問・御要望(総合討論においてコメントを希望される方を含む)は御遠慮無く下記までお寄せ下さい。

〒611 宇治市五ヶ庄京都大学超高層電波研究センター 山中大学

TEL 0774-32-3111 内線3353

FAX 0774-31-8463

e-mail : yamanaka@kurasc.kyoto-u.ac.jp